

自然史系博物館の GBIF への貢献

松浦啓一

(国立科学博物館)

地球規模生物多様性情報機構 (GBIF: Global Biodiversity Information Facility) は OECD のメガサイエンス・フォーラムの勧告に基づいて発足した国際科学プロジェクトである。GBIF は拠出金を提供し投票権を有する正式参加国と拠出金を提供せず投票権は有しないがデータ提供や理事会の議論に加わることができる準参加の国と組織 (NGO など) から構成されている。GBIF の目的は生物多様性に関する電子化されたデータをインターネットによって世界のどこからでも、そして誰もが利用できるようにすることである。また、GBIF は生物多様性条約とそれに関わる活動と深い関係を有しており、電子化データを生物多様性の持続的利用に役立てることを強く意識している。

GBIF の事務局はデンマークのコペンハーゲン大学動物学博物館内に設けられている。GBIF は 2001 年から 2006 年までを初期段階として活動し、1 億件の電子化データを提供することを目標とした。そして、その目標を達成し、現在、約 1 億 6 千 3 百万件のデータが GBIF ポータルを介して利用できるようになっている。初期段階では標本情報と学名の電子化データに重点が置かれ、シードマネーを投入して世界各地の電子化プロジェクトを促進してきた。そして、各国あるいは各組織からの電子化データの発信拠点としてノードを設け、ノードが中心となって当該国、地域、あるいは組織から情報を提供している。

日本には現在、3 つのノードがある。国立科学博物館、国立遺伝学研究所そして国立環境研究所にノードが設置され、日本から約 150 万件のデータが発信されている。その中では国立科学博物館に設置された Museum Node が最大のデータ数を有し、約 90 万件を発信している。また、自然史系博物館を中心とした事業であるサイエンスミュージアムネットが国立科学博物館によって運営され、日

本語によって標本の電子データを同博物館のポータルサイトから発信している。現在、サイエンスミュージアムネットには 40 機関 (35 博物館、5 大学) が参加し、毎年 2 ~ 3 回、自然史情報の発信に関する研究会を開催して、標本情報や観察情報に関わる課題を検討している。

GBIF 全体の中では日本の情報発信数は 17 位であり、18 位の韓国を若干上回っているが、日本の生物多様性や分類群の収録状態を考慮すると、非常に不十分であると言わざるを得ない。日本の自然史系博物館のほとんどは戦後の 1960 年代以後に設立され、歴史が浅いため欧米の自然史系博物館と比較するとコレクションや研究者の数が少ない。しかし、1980 年代以後、県立の自然史系博物館が次々と出現し、恒久的な標本保存施設及び研究拠点として活躍するようになった。これらの自然史系博物館に保存されている標本や観察 (画像) データの電子化が進み、インターネットを通じて利用できるようになれば、日本の生物多様性研究の新たな発展に繋がるであろう。そして、その動きが大学博物館にも波及すれば、日本が GBIF を始めた国際的な生物多様性プロジェクトに大きく貢献できるであろう。



GBIF ポータルのトップページ